



門へ 13
1804
巻

古今奇談續編

葵の旬日冊

浪華書林 五堂合梓

巳卯



古今奇談二下終は。追物の為延享の初に
成らる。頃よりありてを梓を敷く充ちむと

計るにしをば言ふ。むう乃まは英と名付
ぬりぬる秋は志げくと荒海ありと。尚を
指ハ況てありと予お言ふする。指枝の傍り

と多く梓の設と既の備り思。梓する人の答へ
をれど罷。業なきし実れしと。東はふ庵

さよも所はそおもありとぬ。前終ためしと
端か口よと托言す。思ひさや古れ年波を後
鏡言す。此は興るこ誠喜い。尚様とを誌を

古今奇談續編

有れも。古き薄皮の是をへ小蝶の夢乃きとこ。
のこの。梵典は孔雀の裏思ひ。執事花の雲
降る所も。それをも傳の文に足せ侍。人の橋
隙と窺ひ。我經よほて後に大海お放さん工先も也。
此もも早く空言の懸を起り。袖も幸く後又甘む
ずる物より若干足えたり。そ程をなみ凝して。
元の胡の作りゆるを座人の習ある。梁山西
おの万長も展たるは。大津國に漢念の時
代も南る展た。彼より三百葉の前より日本紀の
さへ阿る物よりあり。浮浪として及學の鬼子い

眼を掩りしこと。そ風は疎ら隙を認言。傳
士の君子も洞うなるやを判。さしは六葉を種
て掩りもあらぬ。枝と葉を披きたる偶言ハ。歌ふ人
の眼界もまこと地跡情ハ。海へまよふ。お
塚の後の冬もは。云々の伝を傳よ男とある
神種とし。神代の子れもよ。糸と結して端を
とり。藤小枝娘乃巧令を渾色とるす。右間能
池ハ今橋と河よ多れ。堤築れ衣子繩よあ
る。人柱れ終り。時あり。は歌のなま枝を折る。
昔は程ハ。徐渭が。阿多様を説ひ。習は懐を

荀山ちんざん 芸精樂ぎんせうがく 二編にへん 下人乃かじん乃 層もろ 又また 華陽けわやう さる
 石河いしかわ 王住山きみすぢやま の遺蹟いせき ハ。むろし。其地そのち を閑かん する
 文翁ぶんおう の親おや しく語かた をきける。緒餘よそぎ を継つ ぐるやうなたり。
 たは星せい 信しん と言い 又また 陸沈りくしん する。及および 其その の自みづか 然かに 又また 亂らん れ
 者もの 有あ り。誠まこと 心の使つか 者もの 不な 刈かり せむやうなる。花はな の山やま 芳よし
 の敵たぐひ 小こ を終は ると久ひさ 歩あ 又また 信まう せざるさへ也なり。華ついで たちと
 楮かみ 又また まて。梅うめ しく。空むら 又また 合あ 志こころ むる謂い せもて。羊ひつぎ
 草くさ とも標めし せらるや。市いち 末すえ 後ご 又また 生な てるふあるをいふ名な 宛あて 見けん。

天の雲外あまのうんがい 終冬しゅうとう 十子じゅうし 陶安たうあん 題だい



古今ここん 奇談きだん 著句しやくく 冊物さくぶつ 惣目録そうめろく

近路きんろ 行者ぎやうぢや 著あつ

千里せんり 浪子らうし 正ただ

第一篇

八百はちひゃく 比丘ひしやう 尼人にじん 魚いさな を放生そうじやう して壽しゆ 延えん 益えき と話わ

第二篇

小野おの 阿あ 比ひ 磨ま 踊おど 戲ぎ 又また 譬たとへ て華ひら 法ぽう を説か する話わ

第三篇

求冢俗説此異同冢神の靈同答此話

第四篇

玉林道人雜談して回次を屈する話

第五篇

絶間池の演義強頭此勇衣子の智あり話

第六篇

吉野狸く人間に遊て歌舞を修る話

第七篇

大高何某義を属し影此石に賊射る話

第八篇

猥瑣道人水品を辨し五友此音此識る話

第九篇

白かれ翁運の乗して大に発跡する話

以上九篇

明治二十一年四月廿四日
蘇州府志
蘇州府志

古今奇談秀句冊第一卷

① 八百比丘尼人魚放生して身を益と話

蘇州府志 氏遺愛記

壽福八人の慶養不費て保つべく招くゆへとも先言あるは漢土り仙人と名あるは家訖離山は棲る名山は入る茶を採丹成煉る雲物珍慕ひ棲るを好む早く若生れ人を迷惑し秦の世は文成徐福の道士蓬萊方丈常此玉液をく東海に求て信を流すと傳ふ其烟山は據る人情海島は希稀とらるる因りなる。後宗古坊老子は混りて遊るは道家と稱し。道場を觀と名づ。佛家れ寺の如し。住持とらるる真人と稱す。三清乃像と設す。老子河をさると釈迦の奉も同一。法事供養と醮祭と唱へ神將城石の急急如律令ハ漢の世れ友府語なる。其化業よく密教を襲ひて授實表と互違ますや。仏は西を往つるの地とらるる日月れ没る不は流る道よハ生突現るよ故に東海を企望し作らるる因りなる。道家之流の

天ハ三三樂界ニ準一^道有と為^る昇^る佛^のを^示して往^く其^有ハ^有り
 吾^我ハ^人無^ハ仮^りよ^生を^洗く^れそ^外ハ^洞天^靈地^の別^所を^役け^進達^の
 仙^賢階^級一^々あり^不す^道經^仙籍^ハ古^代ハ^信道^陽方^北八^家雜^子步^引
 引^の十^家あり^石室^洞穴^の秘^處ハ^仙傳^ハ其^國殘^傳一^々を^書あり^も多^くハ
 擬^撰あり^黃帝^レ其^こより^藍采^和の^乞婆^ハい^らり^て老^ハ吳^ハなる^りの^ハ皆
 仙^ハ列^レぬ^王母^ハ妖^ハ似^ハつ^狭拐^ハ五^ハ似^ハく^仙人^の樓^閣ハ^画圖^を見^るも^莫未^レ
 あり^李白^樂天^の之^ハい^ふ如^キも^仙傳^ハ收^め録^したる^多り^道ハ^傳る^中
 ハ^葛洪^洞賓^思邈^ハ竹^猷一^々具^眼の^偉人^ナり^仙家^ハ一^々強^ク吳^弘演
 捨^りま^却て^其人^を疑^ハ一^々其^ハ葛^洪ハ^八十^一遠^く去^り師^を尋^らず
 托^レ思^邈ハ^百餘^一一^々無^何有^レつ^遊と^告ぐ^只其^終焉^城稱^せら^らん
 其^宗者^レ常^例あり^まり^て葛^の抱^朴レ^言ふ^云知^{あり}の^彼ハ^生を^惡
 ず^ん周^魯レ^聖人^ハ己^ハ其^乃を^知る^界仙^一今^仍死^せら^らん^世の^人皆

不^死の^道を^知る^子孫^の國^城ま^す忠^孝を^思ひ^す必^ず人^倫を^和ん
 故^ハ周^魯密^ハ自^用す^秘して^人ハ^告ず^是皆^道城^主張^るの^巧言^今
 此^ハ國^津神^ハ本^地を^合と^らぬ^其一^見識^ハ言^及せ^ハ言^べく^らら^ん
 あり^汝之^の教^ハ人^乃建^立一^たら^乃大^道小^徑共^ハ便^ハなる^安城
 仍^{あり}を^こ小^越く^{あり}一^日せ^ね不^天た^らん^天道^を一^々傳^へんと
 世^ハ人^事ハ^妨礙^{あり}と^豈小^々あり^んや^謂る^壽ハ^長生^ハ其^也も^余ハ
 得^と不^得と^{あり}福^ハ功^勞小^{より}て^富れ^成と^不成^とあり^二つ^も其^守
 ら^バ天^然を^失は^らん^又百^業レ^上久^しけ^レ失^期の^妖と^同と^ハ例
 其^名を^おは^せる^浮人^の故^態なり^彼老^子ハ^道家^の一^流一^言たり^傳
 する^人の^書あり^今汝^又千^言一^言ハ^古より^青牛^ハ大^國ハ^流る^神
 仙^家流^ハ東^方レ^福地^を養^ふ作^ぎ徐^福熊^野ハ^其由^未起^る又^本朝^ハ
 流^る傳^へる^仙人^{あり}実^ハ仙^ナら^ハ蟠^桃レ^今の^上座^ナら^らん^人九^皇

都良香も収りては悦ぶや笑ふや。法道の行を飛たし生け御あり。之仙
 の雲頭を落るとい道んれ肩を弛るあり。是等いとも仁まけの不可
 思議流して西王母れ脈脈いわくさるべし。さよ又飢急ぞ寒くぬ乃
 幸なき衣食の欲無くさるる離るをり。服業をけきども病なく。滋食
 せのども衰へざるい。是こそ地仙こそ標嚴十種のつたるべし。人の言と信
 こそ人を欺くいさく吾人なり。冬空く夏暑くさるる行を再を側てん。其
 以の欽明の御宇とも。若狭なる小浜の漁人朝夕は往來三方に海成
 四方吹風を放さきく方格を失ひ波は浮ひて三日許の後の嶋に
 飄到る岸より上りていさくりれ小浜もさく。海は際んで鱗を奪る大門
 魏然く海を生活身の放さきていさく島もさきよのれと。かたさす
 いてと。彼竹生島よととと。海路長なればさきよのれと。かたさす
 歩よんべ朱門碧瓦金字れ牌よ少女宮の字わり。一人をさるる結髪

れ上よとく透るる肩ものりたるが。漂着を憐れ引く樓門の内よとく
 む。一殿の結構磚柱玉のぬく。水草の文成雉に。五葉唐瓦飾り。万像を
 鏤じ飛禽翼を張く。遙く上楹に翔り舞ひて老の念なく。を敷吉成
 吐くさく危塚を相逐ひ。隆勝の意あり。千門万户壯嚴一れありと
 一境諠色さす。漁人競くく階よをんぐ席をぬく。食膳を扱
 象箸玉把り玉椀乃内成るる。犯美しそ人肉に似るる。漁人汗を
 箸を下しかひたり。庖人とさくさか云。是の人魚肉あり。翻放きて心膽
 を苦しめたる人。是を喰へば力常小返る。さよ島に側隠の乃よ不也
 と。漁人夢て仍喉より下りかひ。その番をこくく吸く。梁飯を食し。肉
 を包て懐よひ。風已よさるる恩を謝し。舟は回る。門老送りおて舟
 れ向よと方格を指し。漁人指さす方成るる。後をかたさす。其
 其人氣もあふもさく。潮る蒼海を際知れ。さるる。行は迷ふ。

風はまじかひ浪は托すこと三日をかり。天れ河原より舟やかへるととよも
遠なるをれ浪はよきぬ。是こそ遠敷に於たり。ふも初てより遠くよき
よもつらぬ。家よ帰まの妻に遠くて候ふ程よ。飄風の波に於たり。懐の
肉を出して是見よといふ。時は女子れ十歳なるが珍味としてよく食
ひます。能喰うと候して事さぬ。け女子其はより漸くと健は病苦
所免えど。心意快稱改るがめし。是なる年長むれ兆とさへ。北とせ
るまじも嫁し。やくと候き。い漁人既よ百歳に後ハ姨と候きて。
七十八十小いさきとせ見えせず。面貌白哲は清くなまじ。艶媚の婦
態あるとなり。日にくまき。清潔を好む俗塵は厭ふ。里人同て白
比丘と候ふ。時改むとき身衰ふ。童小いしてこそ幼年の父乃よ一
仙肉の誘ふるといひ。あるともありし。延長三年醍醐帝痘瘡の御
暈よ。暈の老よ。所新く。命せ。比丘尼が除夜の符よ。若狭の四百

歳の女とあつるといふ。るる斗は受え。其よりい星を我をも扱へど
後ハ住居定めど。他國よりといへも。常小をふま在るがめし。その高
浪よ。是魚の古はげうなるがめし。其頭ハ人面よ。眉身はもり。
肉白く髪赤く長し。紅鱗の間にあり。指は幕蹠あり。下は身の魚
形なり。大魚は魚と見え。磯辺は潜る清湾は滞り。くる事ハ
ゆも。漁人水中に就く網にせき入きて。圍に飼ひ。魚時ハ水より
出。漁人は恩を乞ふ似る。漁人等云。是正し。人魚なり。冷て長命
を保つとす。肉をかち價を高く。あらんと人魚と慕る。富有れ家。是
は常んとも。別ぬ食ふなまじ。ためし。白比丘尼こそ人魚服し。る
と人とい。彼人よ。同て真偽を定めては。常人とい。浦人は比丘尼よ告て。
肉はちとく。あせん。見定め。終はまじ。姨姑ハ。仏の戒禁をもち。よも
あ。幼年よ。食して。味もよ。れぬま。今一たび食せん。は。高



漁よいつて見るに。け魚澄躍り改をまけて。姨姑よむかひ漁を底
を事珠のぬし。姨姑よよふ中。け魚必ぞ肉瓜分たきん憐むべき
ことなる。地仙とがるもの。一千三百れ。吾事をなまると。夢て未と施
さず。我是致舎よとも。究て年を延るとも。知るべし。いりりて。放
ちぬせんと。浦人よ向く云。我。幼少の時。異魚の肉を食う。それとも
人界よいせむ。そ魚をんず。名はし。抱。呉なる多し。山生とよ。魚
鱈魚なる。そ微小なる。守宮と。混せ。やと。海法師の鳥。絨乃。礎と
して。脚よ多子あり。鼈れ。入道。い級あり。今。け魚を。類。て。困。は。是。ま。い
是をも人魚といふ。皆。去。れ。鮫魚。よ。い。あ。げ。但。一。級。よ。牝。牡。あり。晨。旦。の。魚
れ。む。と。河。海。を。か。ふ。ず。海。辺。け。人。牝。牡。を。け。大。池。よ。若。く。の。交。合。す。る
こと人のや。子。け。生。む。に。け。魚。城。なる。に。牝。なる。凡。服。舎。の。牡。雄。の。肉。よ。非
されい。益。あり。味。も。美。なる。故。我。の。舎。よ。ぶ。き。念。あり。浦。人。く。必。ず。用

むせよ。け。牝。魚。城。殺。さ。ば。牡。魚。懐。う。猫。獺。を。衆。魚。を。駆。や。り。て。大。漁
網。の。害。を。ば。近。辺。の。漁。困。窮。よ。及。ぶ。べし。今。け。魚。よ。牝。へ。け。浦。人。漁。利
多。う。り。め。よ。そ。放。さ。い。却。て。一。郷。の。洞。色。ち。る。べし。と。がる。浦。人。も
且。思。き。と。伏。し。て。倭。ち。魚。よ。向。ひ。作。を。放。ち。中。に。け。亦。猫。利。多。かり
む。つ。や。と。り。大。魚。改。を。か。して。其。い。躍。ら。中。あり。や。が。て。罔。網。を。去。て
け。ま。い。す。く。潦。刺。と。を。り。て。流。き。よ。入。り。し。が。す。い。浮。て。改。城。さ。け
浦。を。ん。る。已。し。し。て。そ。月。下。り。け。地。の。獵。業。大。に。益。す。と。浦。の。尺。八。魚
小。松。原。の。鼻。折。朝。ま。す。き。多。う。う。た。れ。の。浦。人。い。よ。け。比。丘。尼。の。信。を。が。す。と
姨。姑。の。三。方。の。幽。深。よ。草。舎。を。造。り。て。構。け。り。そ。地。の。少。年。の。暴。ら。る
その。四。人。密。に。計。合。せ。長。生。の。人。れ。人。道。の。め。ん。なる。試。よ。と。け。比。丘。尼
往。来。れ。通。よ。當。て。常。よ。何。ひ。等。つ。一。日。果。し。て。敢。と。あ。て。左。太。さ。り。夾
と。抱。く。比。丘。尼。教。も。登。る。す。あ。れ。眼。よ。抉。て。ま。る。と。疾。風。の。と。く。流。差

東州新聞 賣部卷一

此悪女追へども追及む。此丘尼を人をかゝるなぐり海中に飛入り
 偶々沈んで見えす。実や大海死尸を容て明朝魚サの支戸を干渉し
 ち舉り。悪少の家より守護は祈へる。及んで尼姑は其のよしを
 ふも庵に静坐して看る。是は知識はと。溝をよこぐり同ふと款
 なるに。比丘尼は同窮む。つとむあは。後にも悪女等比丘尼に害
 をかきいよ。さるに。比丘尼来て撲て海に入。け故る畏て
 仇するもの。背言して謂人あり。世に安んず。魚類も脩煉久しけ
 きい尾脱し。鱗氣落て人身に化すといひ。比丘尼即ち人魚の精を
 ちやと雑食をせど。仇らつづ。百年の幾くして後醍醐帝南朝
 の号諡を穿て。昔符をとり。時の帝諡は曰くと云ふ。又四百年
 いに。と人も知り。け時大に信せ。長生の心得を問ふ人ありて去
 老君の言は。谷神あり。呼吸をせ。いさ。け故ら。と。

谷神不死とて。長生の訣とせ。わの取とせ。わ。妹姑云。老君の言は。ま
 ざ。我志。山谷の。我れ。人。活。の。人。の。て。

谷の地を容て。其の。谷神と。其の。を。の。と。

り。た。い。わ。し。神を。外。長生の。訣。人。の。に。と。

此。に。と。表。を。れ。長生。と。は。は。い。わ。る。ま。さ。り。さ。な。り。我。に。浦

に。生。れて。網。を。禁。か。く。隙。細。の。禁。利。の。お。い。わ。ん。是。を。り。

の。豊。を。を。知。る。貧。國。を。福。地。と。拾。て。人。を。望。を。が。ら。仙。人。が。ら。

ち。は。一。と。仙。及。い。ら。り。て。を。わ。ら。す。但。我。の。な。り。長。生。れ。人

に。性。受。り。別。わ。ん。無。慈。心。一。外。一。節。食。丸。を。服。す。り。も。因。

す。と。と。ぬ。も。こ。こ。こ。小。溪。の。土。地。後。の。ま。若。う。橋。を。て

初。人。常。に。掲。げて。渡。る。是。よ。石。を。架。さんと。希。一。も。腐。易。あ。

て。久。く。黙。一。ぬ。妹。姑。傳。へ。て。云。我。お。苗。の。石。を。人。定。め。

好ま時又以て載て架べしと。さき此史人皆戲言と云ふ。此地
を去ること四里ばかり隔て和田といふ。平盤の石ありて壁立
せり。姨姑常よけり石の下に坐して抱く。以て地を叩きて
言ふ。近きよ位める人ぞ故を問へ。云。同ども昔んと云ふ。け
石能言よ言よ。承け地を真旺あり志めんともよゆ徳れ吾國
か。我を撰まき小湊の掲渡り架さべ。そこはれ行人脚を湿
す。後來又限うなき利益あり。左ある時けは又福地となんとも
くえ。法く方便をめぐすべしと。人の勤くこと常よ把定
なし。和田れ土人比丘の言信。馬目石の下に群り工夫を用ひ引
めり。送石教よ力を合せてあるのるよ小湊は移り。彼流よ
架すよ。鑿く適るると云ふ。姨姑悦て我教石を載て去り。小
わすれと戯れくると云ふ。け比丘の終るを知る人なく。を構とて空高

れ跡今もあり。長生彼がめさしそれ久し。抱えし靈ありやを
仙へ知れ。古くいさりと訓せらる。秦國の餘風あり
② 小野れ阿津魔彌教よ壁へて筆法を説く話
草體の假名國字となりてゆきや。そ役官なること玉れ交る。し
性右遣使よ具して抱きびは唐土よ入りくると。教よいしと我勝よ
言らあれど。け大團の彼去り勝めらる。小事を以て論す。け
弘法大師生貨の能書よ。彼土よ筆法をゆき。殊文なる。世よ
三跡と並べ称する。皆絶倫の藝なり。別て道風あり。のほ高
名よ。能書れ人れを去りし中法よ小野と名のる人なり。へづき
徳ある人の氏族えし。血脈のよわじ。筆のた好める人の流し
き。筆あり。ひり。繁榮の地よ。小野静まると能書あり。道風の正し
き筆を悟り。筆禮よ妙よ。一揮三十字。神勢を失ふ。又漢土官



府署寺れせけを能く是は城の法則とす。をくら古今の能く
扱へ入る。惟け人成ると評するも其法はあつるべし。それが
子に丘下阿津磨とて女等あり。性は等しく是あり。友を執て絶妙
する。女流を師としてその人柄よく心懸く。その号は應じく鑑
本心は等しくゆえ。智人をもよく。その門は市成なり。常に才子
よき。て云。おのこを折くは通の妙といの。之島の社に集
す。通夜の後。白目とてよか冥くなり。その間忍ろく。腕能動は
曲して宛伸を執ひ定ぬ。其状眼に空るとわく。こよして晴
藝に結ひる。神人出あつて。筆はゆるりと同。友は教して云。只
畏怖て人定りゆくと。各は色。神人云。たあんとよ。さうごくや。以
れ。さまがらりと人定り尾ようぬ。ゆるゆるの勢も息もよく。取定ぬ
が。活抱の妙をよ。夫をせよ。おのこはよ。彼偶龍をよ。若し

よく命得して今もその勢いをまき。形容定るるを終とす。れは初
法をまき。まひ。後よ法は細めれぬ。時に成龍とす。今其法を
ゆ。ゆめゆめと扱へ。時に神人袂より大の鱗一片とえ出。こ
是をよ。根へ平うして。丸とて似て。積土の形あり。是を三稜なる
のよ。ええ。なるが法あり。詩に蔡邕楷正の字成。工夫して。石室よ異
人よ。扱へると。枕せし。素幅へ方正あり。抱はれ。斜角は抱をい。等
下すの法よ。是等。後世は巧者の人擬造して。規矩は三
折を借。圓を正申。三稜は規成入。三つは断。内の斜角を楷
法の法とす。外の三角乃一角をえて。法とす。是所ち上代の假名
法は落荷とて。蓮の花辨の散て。其窩に及る。は新月の如くなる。是
を幾つも連る。續け。法とす。古人の字形を。本原の字は。一から
一。飛仙をま。よ。本朝に能く。三跡の文なり。兼明王号。四王の

んゆくまうにちきうる筆松山寺に成りたる地いさひは似るも
及ぬ所おほくあり。文字ちね蜜夷も法どき事疑ひあり。かく云
我の作が怒れる幸魂の神饒に影かりたるそと示されてより。現はけ
言成志ます。好ける人こそ奥いも志終つんと。常は鄭云せり。其
門下業を文る女師多く。小姓姓を許され聰とひひ通と字なり。遊君の
野風は雅名なり。ねま子などよくとちきいそ。又一派の教へあり。とて
れ字形美に偏せし勢脱け。魂は偏せし歎とかく。一字れ内は美魂
ありといふも。辺と魂と一。旁はみよがす。いもあは美魂を互に字
いせて等法よほひ字をなす。みい易くして勢脱失ひやく。魂はな
かかしくよく氣象成書。一字は美。一字は魂。交へてよやく
え遠いともあり。色はく人の偽名の字終れ。一字は片假名。對
して丸かるともいふ。子の内は子とて。字終をえん。れい字形は杜撰

あり。字形をいふも字勢のいふれ。氣といふべし。其物の活動い
けは却都の踊りとて。戯もわつ。是を字終の態に似せし。田
より起うて舞の畧といふ。恐る舞の燈籠なり。嬉しくて書
言ても少くぬ固秀が。氣成志して邪とさけひ。いまご字もあはぬが右
よりい文字を踏む。某の家お子。脚をす。参る。あはぬ。右
ひらと幸のいとせたり。腰は斜に振る。双脚を外に踏出す。けうかき
ころ時。も程拍子を失つ。ころも急野。なまも氣と目す。それ
一場。一用。匝の短句あり。粟田松坂も越ぶ。も長篇あり。先幅紙の廣狭
とと。ご字の大教を終えて。き一場の踊り。れ後急に視合せ。等と執
る。精氣。け長て弛べ。精氣ゆるまる。時。間。一度二度。之態。乃拍
子。よ。差。ひ。て。ん。脱。と。く。精氣。衰。せ。ん。る。堪。ぐ。く。た。を。さ。り。と
と。右と踏。し。たれ。も。ぬ。ん。と。く。いた。う。出。づ。一。画。を。と。り。て。後。又。一。画

を切ら申う。その老筆は、態よく、廉角一つれ。は、態ひも、そのめ
は、足隨てす。その退け、脚は、よく、退く。は、辺、旁、れ、分、ち、な、る。その、文、を
を、れ、よ、う、て。その、強、弱、人、目、は、違、わ、れ、び、ま、り、も、その、流、を、ね、ぞ、よ、く、其、妙
を、よ、う、て、い、踊、り、ん、ん、そ、其、人、を、忘、る。腰、は、態、を、生、ま、る。い、娼、伎、は、流
ま、て、雅、を、ま、る。ま、れ、腰、と、い、つ、ま、程、の、ゆ、い、あ、る。筆、は、腕、と、人、の、ま、は
書、を、れ、與、つ、ね、ず、な、る。左、を、先、ま、さ、し、右、は、先、ま、さ、す、い、大、大、の、類、あ、る。
田、舎、の、若、ら、う、拍、子、と、つ、た、く、掌、と、打、を、度、と、す。於、今、の、地、は、態、度、後
ふ、柳、揚、花、う、ま、つ、四、つ、れ、向、ま、忙、し、ま、結、あ、る。左、は、卷、嵐、右、は、卷、嵐、す
は、横、心、連、火、の、字、な、る。い、尖、を、一、い、拂、ふ、が、一、度、あ、る。拂、い、ぬ、も、ま、ま、は
一、。文字、い、も、ま、短、ま、も、強、ま、る、強、ま、る、も、定、め、あ、る。ま、つ、四、つ、と、拂、ふ、其
の、強、ま、あ、て、も、い、ま、を、節、度、を、含、ま、て、勢、を、脱、ま、す。大、娘、劍、意、の、た、と
も、外、あ、る。い、ま、紙、下、す、の、際、は、或、画、と、い、ま、う、あ、ん、や、又、撃、あ、る、人、の

已、一、刀、若、ら、う、も、。從、鋒、を、利、く、に、構、て、是、ま、ぐ、と、ま、ま、ま、く、。其、
ま、ん、い、裁、ま、い、も、斬、つ、ま、い、う、も、。劍、鋒、を、ま、ん、ま、握、す。茶、理、を、説、ぶ、人、の。
強、ま、茶、七、を、ま、ま、ま、ぐ、め、く、え、あ、り、ま、い、一、。を、画、う、て、字、ね、ま、く、も、。そ、
始、の、右、を、指、し、左、は、指、の、所、を、立、を、や、り、て、足、踏、な、あ、す、い、ま、く、し、て、は、字、
體、退、ま、る、。ま、ま、い、迂、闊、ま、ま、れ、び、先、ま、ま、る、字、形、は、勢、を、定、め、ら、れ、て。
ま、か、つ、る、ま、ま、ま、が、つ、た、ま、ま、あり、。それ、方、ま、卷、帖、條、幅、厚、薄、ま、ま、ま、つ、こ
ま、ま、い、自、然、ま、序、破、急、れ、体、物、あ、り、て、中、程、ま、拍、子、も、約、束、も、い、ま、ま、つ、ま、程
の、下、ま、つ、ま、ね、い、ま、人、お、お、無、の、善、ま、ま、ま、生、ま、ま、ま、。祭、典、ま、ま、ま、。ま、ま、ま、ま、
能、ま、の、ゆ、ま、ま、。踊、り、ま、お、の、ま、ま、ま、田、舎、娘、れ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
連、綿、ま、ま、ま、板、ま、ま、ま、下、か、ま、ま、。拍、子、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
成、て、い、ま、ま、の、甲、斐、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
る、が、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

○英州各書讀編卷一

五



らん。そのよりやあつてよくさげらる。うそこれ等消て尺ゆも。今い
とひさし並へて見え。動て出る所あり。等河運をに等とつりあ
す。中程に離れて。等よの徒さる所あり。彼等頭は屈伸し縁似
るがらあんと。大氏示す。と返あつ。んと用するところをえらるのうか。
て久しく時めき移りさる。年も移りけし。い。應對も厭わく。今い
故はよゆつて。かきよ。よ。生。送。人。と。多。此。門。牙。子。は。特。別。と。な。り。報。具。と
知る人よ。も。は。り。あ。つ。て。餓。別。の。傍。り。抱。宅。よ。充。つ。る。そ。ま。い。を。携。へ。て。居。位
を。辞。し。婢。僕。彼。等。隨。へ。て。登。足。し。さ。る。近。江。なる。日。野。の。産。さ。き。に。中。よ
て。美。流。と。近。江。へ。岐。づ。き。を。高。次。郎。と。つ。し。驛。よ。つ。つ。志。さ。く。午。睡。せ
んと。屏。風。志。つ。ひ。て。臥。さ。る。時。の。よ。時。つ。つ。け。さ。い。使。女。も。さ。ら。へ。と。屏
風。の。か。う。り。何。ん。か。く。ん。さ。る。よ。耐。野。の。音。さ。く。も。さ。ら。へ。て。寝。さ。る。姿。常。よ
か。ら。う。身。動。さ。に。あ。つ。て。お。ろ。し。さ。さ。り。は。れ。若。を。呼。て。足。を。告。げ。怪。し

とむそめくほどに。は。は。は。摩。目。を。さ。ま。し。や。ぐ。て。素。足。よ。て。後。よ。出。さ。あ
ら。り。れ。竹。藪。の。中。よ。入。り。氣。も。足。け。し。さ。ら。藪。の。内。を。探。さ。し。目。よ。え。ら
る。か。し。そ。日。暮。れ。も。ゆ。り。あ。く。ね。へ。指。て。や。く。口。野。と。や。ん。へ。寄。赴
さ。る。か。し。も。あ。ら。も。あ。ら。も。さ。ら。ま。る。ど。ま。る。ど。れ。家。も。由。法。の。人。も。か。し。か。れ。い
そ。ら。し。新。の。と。よ。う。訴。へ。そ。旅。装。よ。貯。の。材。資。へ。遠。く。送。り。し。送。者。れ。料
よ。配。分。し。て。離。あ。し。さ。ら。と。さ。ら。丘。よ。首。さ。ら。の。本。末。を。失。つ。ず。か。し。さ
し。本。形。を。現。せ。さ。ら。い。説。つ。る。婢。僕。等。人。の。物。を。蒙。ら。ん。そ。言。さ。ら。や。馳。注
獲。て。焦。頓。を。容。る。と。な。り。さ。を。抱。さ。ら。や。尾。を。垂。て。不。朽。を。お。る。あ。ん

小糸 系圖

古今奇談芳句冊第一卷終

長州藩 賣場 卷一

十四

